

8 1. 青森県3例目（蓬田村）の事例

(1) 概要

① 所在地

青森県蓬田村

② 飼養状況

採卵鶏 約33万羽

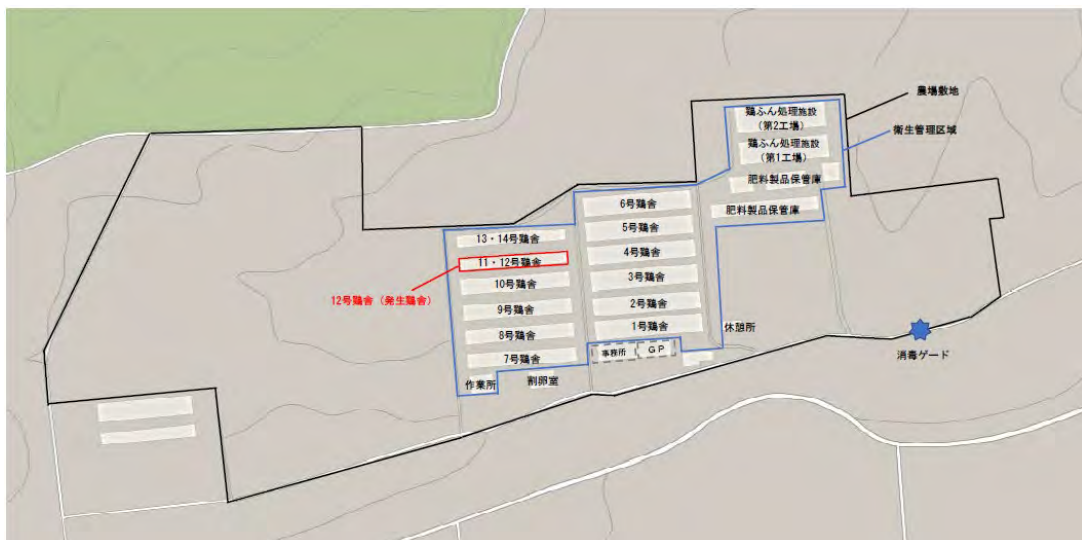
鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎	26,086羽	235日齢
2号舎	21,247羽	598日齢
3号舎	23,964羽	554日齢
4号舎	26,003羽	281日齢
5号舎	21,477羽	645日齢
6号舎	26,364羽	186日齢
7号舎	26,413羽	326日齢
8号舎	27,116羽	140日齢
9号舎 (空舎)	—	—
10号舎	22,903羽	690日齢
11号舎	27,571羽	508日齢
12号舎 <発生鶏舎>	28,058羽	463日齢
13号舎	28,337羽	417日齢
14号舎	26,056羽	372日齢

(令和5年3月24日現在)

③ 発生確認日

令和5年3月24日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年3月24日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は平野部に位置し、付近は雑木林、草地、沢に囲まれていた。
- ② 農場周辺にはため池が複数あり、調査時、農場から0.4kmのため池には、マガモ116羽、キンクロハジロ18羽など合計153羽のカモ類を、農場から2.1kmの海岸にはカモ類80羽、カモメ類100羽以上を確認した。また、農場に隣接する草地にはカラス類が計270羽以上確認され、鶏舎の屋根や農場内を行き来していた。
- ③ 鶏舎は14舎（うちウインドウレス4舎（1棟の内部が壁で区分され、1棟当たり2舎）、開放10舎）あり、発生時は空舎の1棟を除き、採卵鶏が飼養されていた。発生鶏舎は2階建てウインドウレス鶏舎で、背中合わせの直立7段2列ケージ（1階4段、2階3段）であった。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時462日齢）の1日当たりの死亡羽数は通常10羽程度のところ、3月23日朝の見回り時に、列の手前半分側の2階の下から1、2段目を中心に複数ケージで死亡を確認し、1ケージ（6羽）内の全羽が死亡するなど、まとまった死亡が確認されたため異状を感じ、家畜保健衛生所に通報したとのこと。発生鶏舎だけで50羽以上が死亡していたとのこと。
- ② 発生鶏舎では2か月前から下痢が多く、餌食いが落ちていたと感じていたため整腸剤を投与していたが、最近下痢が落ち着いてきたと感じていたとのこと。
- ③ 調査時、発生鶏舎の全ての列で多数の死亡・衰弱鶏を確認した。特に2階部分の列の手前側に死亡・衰弱鶏が多く見られ、チアノーゼや顔面浮腫を呈する個体もいた。隣接鶏舎を含むその他鶏舎の鶏には異状は認められなかった。

(5) 管理人及び従業員

- ① 従業員は正規4名（全員が鶏舎内飼養管理担当）、パート8名（うち2名が鶏舎内飼養管理担当、1名が鶏糞作業担当）、外国人研修生1名で、鶏舎ごとの担当は決まっていないとのこと。
- ② 当該農場から約200mの系列育成農場と当該農場の事務所、駐車場、更衣室や飼養管理担当者は完全に区別されていたが、鶏糞作業担当者は両農場間で共通とのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 衛生管理区域入口には立入禁止看板と側面と上部から消毒液が出るタイプの車両消毒ゲートが設置されていた。育成農場への来場車両（飼料運搬車両等）も同じゲートを利用し、当該農場内の私道を介して育成農場に入場するとのこと。
- ② 従業員の出勤時は、車両消毒ゲートを通過後、GPセンター併設の事務所前の駐車場へ駐車し、事務所内で農場内用の作業着及び長靴を着用しているとのこと。
- ③ 飼料会社は衛生管理区域専用長靴を持参して着用し、廃鶏業者、管理獣医師等の鶏舎に入る来場者は、衛生管理区域入口のプレハブ小屋に備えられた来場者用の衛生管理区域専用防護服及び長靴を着用し、鶏舎に入る際は従業員と同様の衛生対策を実施するとのこと。
- ④ 発生鶏舎は、同じ並びにある集卵室、開放4舎及びウインドウレス3舎と通路でつながっており、鶏舎に入る際の更衣室は一番端の集卵室入口に設置されていた。更衣室はワンウェイ方式となっており、すのこの手前で衛生管理区域専用長靴を踏込み消毒（逆性石けん、毎日交換）して脱ぎ、全身消毒及び手指消毒後に、鶏舎専用の長靴及び手袋を着用していた。
- ⑤ 各鶏舎1階には外に通じる扉があり、鶏糞作業担当者が除糞ベルトを動かすために出入りするほか、飼養管理担当者が屋外にある水道を使うために出入りすることがあるとのこと。その際、長靴の交換はしておらず、踏込み消毒を行なっているとのこと。
- ⑥ 各鶏舎の卵は集卵ベルトで集められ、インラインで場内のGP施設及び割卵施設に運搬されており、集卵コンベアは全体がトタンで覆われていた。
- ⑦ 朝の見回り時に死亡鶏を見つけた場合は、死亡原因ごとに羽数を記録した上で、専用の蓋付きバケツに収集し、毎日回収して農場内の焼却炉で焼却処分しているとのこと。

- ⑧ 鶏糞は、各鶏舎、週2回程度除糞装置を稼働し、トラックで衛生管理区域内の堆肥化施設に運搬し処理していた。隣接育成農場の鶏糞も共通の鶏糞作業担当者及び車両で同施設に搬入しており、当該農場内を横切る際の車両消毒は実施していないとのこと。
- ⑨ 完熟堆肥はフレコン又は袋詰めで販売しており、製品は自社の車両で運搬又は購入者が自ら衛生管理区域内に取りに来ていた。車両は車両消毒ゲートで車両消毒を行ってから堆肥置場に入ることとしており、3月～4月は特に農家の来場が多いとのこと。
- ⑩ 除糞ベルトからコンベアへの落とし口には木の板で蓋がしてあり、コンベアは建屋内を通過していた。コンベアの外部への露出部にはネットが設置されており、多少の破損は見られたものの大きく開口している箇所は認めなかった。
- ⑪ 飼料タンクには蓋が設置されていたが、飼料タンクから鶏舎への搬送パイプに経年劣化による破損が見られ、調査時、発生鶏舎周囲に大量の飼料がこぼれており、スズメやカラスが大量に集まっていたほか、野鳥の糞も多く認めた。
- ⑫ 水は井戸水をくみ上げ、消毒せず使用しているが、飲用に適する水質検査を実施しており、タンクに貯水した井戸水は配管を通じて鶏舎に閉鎖系で供給されている。
- ⑬ 発生鶏舎では鶏舎側面から入気し、天井モニター部に設置されたファンから排気していた。天井のファンは気温により自動制御されており、ファンが稼働していないときはシャッターが閉じる構造となっていた。側面の開口部には、金網が設置されており、金網に目立った破損はなかった。
- ⑭ 鶏舎ごとのオールイン・オールアウトを行っており、隣接育成農場から大雛を導入する際は雛を運搬するトラックは鶏糞作業担当者が運転し、育成農場側の従業員が雛を積み込み、当該農場側の飼養管理担当者が積み降ろしを行っていた。

(7) 野鳥・野生動物対策

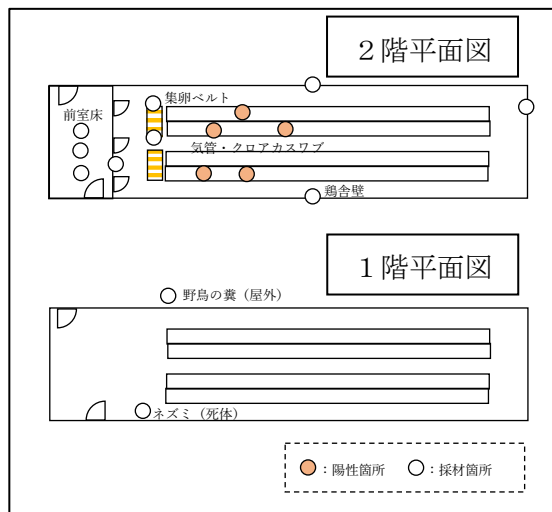
- ① 飼養管理者によると農場周辺では、キツネ、タヌキ、イタチ、カモシカ等の野生動物を見ることがあるとのこと。農場周囲にフェンスは設置されておらず、周囲の林や草地から農場内への野生動物の侵入は容易な構造だった。以前に農場内でネコを見かけたことがあるが、捕獲して遠くに放し、今は見かけないとのこと。
- ② 飼養管理者によると、ネズミ対策として殺鼠剤を散布しているが、鶏舎内でネズミを目撃する頻度は少なく、月2匹程度とのこと。調査時、発生鶏舎においてネズミの死体を確認した。
- ③ 農場敷地内に防火用ため池や水槽、小さな池があり、防火用ため池では日常的にカモ類を見かけるとのこと。ため池には鳥よけのテグスや周囲のネットも張っていたが、強風で破損したとのこと。
- ④ 調査時、鶏舎の屋根や飼料タンクの上、鶏舎間の通路に多数のカラスを確認した。また、鶏舎入気口のフード下にはスズメが多数出入りしていた。開放鶏舎内ではスズメの侵入を確認した。

(8) 環境サンプル

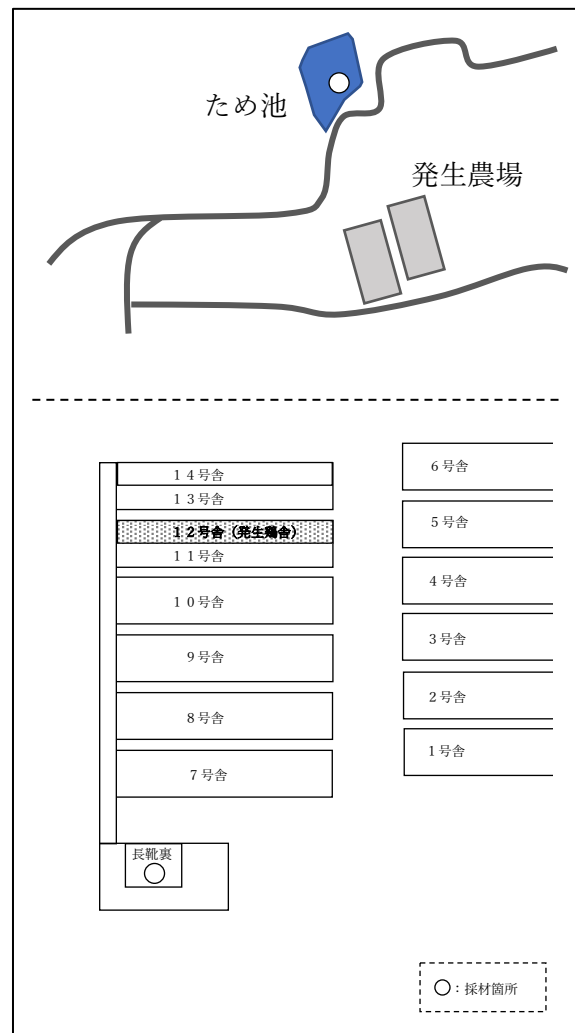
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（12号舎）	前室床、鶏舎壁、集卵ベルト、 <u>気管・クローカスワブ</u> （死鳥1、死鳥2、死鳥3、死鳥4、死鳥5）、ネズミ（死体）、野鳥の糞（屋外）
更衣室	長靴裏
環境水	農場近隣のため池の水

【発生鶏舎採材場の見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



8 2. 北海道 3 例目（千歳市）の事例

（1）概要

① 所在地

北海道千歳市

② 飼養状況

採卵鶏 約 55.8 万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎（空舎）	—	—
2号舎（空舎）	—	—
3号舎 <発生鶏舎>	29,048 羽	518 日齢
4号舎	25,128 羽	518 日齢
5号舎	35,235 羽	518 日齢
6号舎	34,306 羽	518 日齢
7号舎	34,722 羽	518 日齢
8号舎	31,324 羽	518 日齢
9号舎	69,447 羽	518 日齢
10号舎	30,358 羽	518 日齢
11号舎	32,233 羽	518 日齢
12号舎	34,010 羽	518 日齢
13号舎（空舎）	—	—
14号舎（空舎）	—	—
15号舎（空舎）	—	—
16号舎	32,981 羽	518 日齢
17号舎	32,341 羽	518 日齢
18号舎	28,346 羽	518 日齢
19号舎	29,942 羽	518 日齢
20号舎（空舎）	—	—
23号舎	59,827 羽	518 日齢

（令和 5 年 3 月 27 日現在）

③ 発生確認日

令和 5 年 3 月 28 日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日

令和5年3月28日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は酪農場や田畑に囲まれた平地に位置し、農場横には川が流れており、農場から0.5kmほど離れた川の下流域にはマガモ13羽等のカモ類計17羽を確認した。
- ② 当該農場から約2.9km離れたゴルフ場の池には、36羽のヒドリガモ等のカモ類計41羽を確認した。また、農場から約2.6km離れたゴミ処理センターでは、100羽以上のカラスを確認した。
- ③ 当該農場はセミウインドウレス鶏舎21棟からなり、北側の鶏舎群11棟と南側の鶏舎群10棟は、鶏舎群ごとに入口側に設置された内部通路で連結されていた。発生時は15棟の鶏舎で採卵鶏が飼養されており、発生鶏舎を含む13棟は1階建て背中合わせの直立4段4列ケージ、その他2棟は2階建て各階背中合わせ直立4段ケージが設置されていた。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時518日齢）の1日当たり死亡羽数は4～5羽程度で推移していたところ、3月27日朝、鶏卵や鶏糞搬出口に一番近いレーンの中央付近の下2段で多数の死亡鶏（270羽程度）が認められたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。また、ケージ内で飼養されている6～7羽の鶏が全て死亡している箇所も確認さ

れたとのこと。なお、前日夕方の飼養管理時点では採餌、飲水量及び産卵数に異状は認められなかったとのこと。

- ② 調査時も、通報があったケージとその横方向に隣接するケージやその上下のケージに加え、その背面のケージで多くの死亡鶏、衰弱鶏が認められたほか、鶏舎奥の集卵ベルト周辺には軟卵が複数落下していた。発生鶏舎以外の鶏舎では異状は認められなかった。

(5) 管理人及び従業員

- ① 農場管理者によると、当該農場の作業従事者は35名で、うち8名が鶏舎内での飼養管理に従事し、飼養管理の代行要員として3名が従事しているとのこと。そのほか、3名が管理主任、10名が鶏糞の処理、4名が選卵作業等、3名がネズミ対策、3名が鶏舎の洗浄及び修繕を担当しており、残り1名は事務作業に従事していたとのこと。
- ② 8名の飼養管理者は1名当たり2～3鶏舎を担当しているとのこと。なお、代行要員の担当鶏舎は決まっていなかったとのこと。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の境界の一部（道路側）には柵が設置され、2か所ある農場出入口は使用時以外、閉鎖されていたとのこと。
- ② 飼養管理者によると、飼料運搬車、従業員の車両等が衛生管理区域に入る際には、衛生管理区域境界にある車両入退場ゲートで車両消毒を行っていたとのこと。さらに、飼料運搬車の運転手など外来入場者については、衛生管理区域専用の長靴、服、帽子を着用し、手指消毒を行って入場していたとのこと。
- ③ 従業員は、衛生管理区域外の駐車場に車を停めた後、事務所にて、衛生管理区域専用のつなぎ、二重のタイベック、長靴、帽子及び手袋を着用し、農場内へ入場しているとのこと。鶏舎に入る際には、鶏舎入口に設置されているすのこの手前で踏込み消毒（逆性石けんとアルカリ水を混合したものを毎日交換）、噴霧消毒及び手指消毒を行い、外側のタイベックを1枚脱ぎ、鶏舎専用長靴に履き替え、再度踏込み消毒を行っていたとのこと。なお、各鶏舎群はそれぞれ屋内の通路で連結されていたが、従業員は担当の異なる鶏舎には通路からは立ち入ることはないとのこと。
- ④ 鶏舎内は自然換気を行っており、鶏舎側面の下部は径20mmのフェンスを挟んで2枚のロールカーテンが引かれており、この時期は常に下していたとのこと。鶏舎側面の上部にはパネルが設置されており、従業員が手動で開閉することで給気の調節をしていた。天井部の排気口（モニター）は屋根に風除板が立てかけられており、30cmほどの隙間があったものの、その上から径20mm及び40mmの防鳥ネットを二重にかけているとのこと。
- ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は鶏舎内の洗浄・消毒を行い、空舎期間は30日程度設けていたとのこと。農場内の直近の導入は3月20～23日で、当該群には調査時に異状は認められなかった。
- ⑥ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌できる構造となっていた。
- ⑦ 飼養鶏への給与水及び洗浄水には、塩素消毒した井戸水を使用していたとのこと。
- ⑧ 集卵ベルトが鶏舎外に出る開口部は鶏舎をつなぐ廊下内に設置されていたため、外部に開口している箇所は認められなかった。除糞ベルトは2、3日に1度程度稼働するが、稼働時を除き、鶏舎外のベルトラインの排出口はパネル等塞いであり、小型野生動物が侵入できる構造とはなっていなかった。
- ⑨ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎朝の飼養管理時などに回収してポリバケツに一時保管し、毎日複数鶏舎の分をまとめて死亡鶏回収業者のホイールローダーのバケツに入れて運び、農場内の堆肥舎で鶏糞とともに発酵させていたとのこと。
- ⑩ 管理獣医師はいるものの、3月に入って以降の訪問はなかったとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

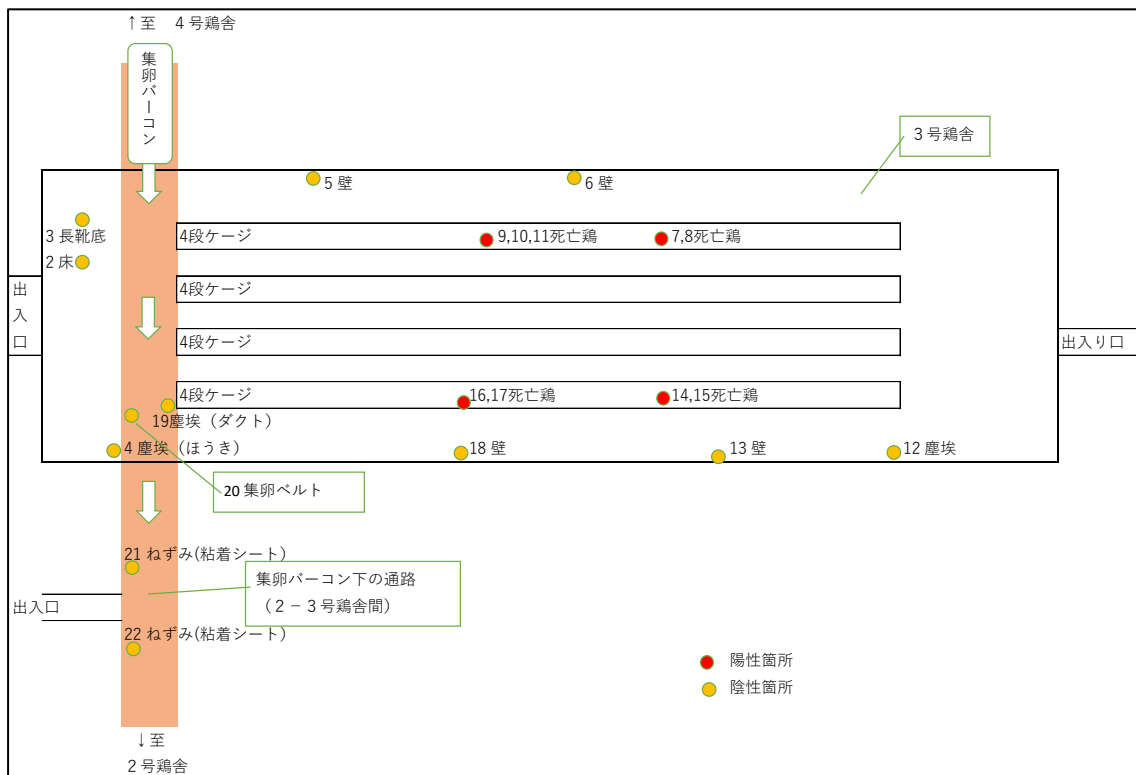
- ① 飼養管理者によると、以前はアライグマやキツネが鶏舎内に侵入することがあったが、鶏舎のフェンスを新しくしたことにより、数年前から見かけなくなったとのこと。一方、堆肥舎内には侵入し死亡鶏を持ち去ることがあり、足跡を見かけることもあるとのこと。
- ② 鶏舎内のネズミ対策としては、専門の従業員を充てて、殺鼠剤や粘着シートの設置をしているが、ネズミはまれにしか捕獲されないとのこと。
- ③ 調査時には、堆肥舎でスズメを確認したほか、農場上空を飛翔するカラスを確認した。また、鶏舎内において、粘着シートに捕獲されたネズミを確認した。発生鶏舎では、前方入口右手の粘着トラップで3匹、隣接する鶏舎との間の通路の粘着トラップで2匹の小型のネズミを認めた。

(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (3号舎)	前室床、長靴底、出入り口付近ホウキに付着したほこり、壁、 <u>家きん (死体)</u>
未発生舎 (2号舎)	鶏舎壁
発生鶏舎と未発生鶏舎間 (2、3号舎間) 集卵ベルトの下の通路	ねずみ死体
農場内コンポスト舎近くにある灯油タンク防油堤水たまり	水

【発生鶏舎採材場所見取り図】



83. 北海道4例目（千歳市）の事例

(1) 概要

① 所在地

北海道千歳市駒里 2208 番地

② 飼養状況

採卵鶏 約 35 万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
1号舎	22,500羽	512日齢
2号舎	38,456羽	485日齢
3号舎	16,300羽	512日齢
4号舎	39,850羽	334日齢
5号舎	39,978羽	331日齢
6号舎	40,268羽	170日齢
21号舎 <発生鶏舎>	71,189羽	562日齢
22号舎	77,968羽	264日齢

(令和5年4月2日現在)

③ 発生確認日

令和5年4月3日

④ 農場見取図





(2) 現地疫学調査実施年月日
令和5年4月3日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 農場は平野部にあり、近隣は牧場や田畑に囲まれた平地にある。
- ② 当該農場は2階建てウインドウレス鶏舎8棟からなり、発生鶏舎及びその隣接鶏舎は背中合わせの直立8段（各階4段ずつ）ケージ4列、それ以外の鶏舎は背中合わせの直立6段（各階3段ずつ）ケージ4列を有し、調査時、全ての鶏舎で採卵鶏が飼養されていた。
- ③ 衛生管理区域外にGPセンターが併設されている。農場の従業員とGPセンターの従業員は交差しない体制となっているとのこと。
- ④ 当該農場は国内82例目発生農場を中心とした半径3km以内の移動制限区域に位置している。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 82例目の発生に伴い3月28日に実施した発生状況確認検査において、陰性が確認されていた。

- ② 農場によると、発生鶏舎（通報時 564 日齢）の 1 日当たりの死亡羽数は通常 8 羽前後であったところ、4 月 2 日朝の健康観察時、入口側から見て奥側の 2 階で、連続する数ケージにおいて 15 羽程度のまとまった死亡やその周辺で沈鬱個体を確認したため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。その後、他の鶏舎を確認したところ、発生鶏舎に隣接する鶏舎においても死亡数の増加が確認されたとのこと。
 - ③ 発生鶏舎と隣接鶏舎は、同じ従業員が飼養管理していたとのこと。調査時においても、発生鶏舎の同エリアでまとまった死亡が確認された。また、隣接鶏舎においては、中心よりやや入口側を中心に、所々でまとまった死亡が確認された。
- (5) 管理人及び従業員
- ① 農場によると、従業員は 21 名で、鶏舎での飼養管理はこのうち正社員 8 名で行っているとのこと。なお、当該農場では関連農場と従業員が一部共通しており、鶏舎担当 2 名は当該農場及び関連農場の両方に勤務しているとのこと。また、鶏舎の担当は 1 人 2 鶏舎で決まっているが、休みなどで担当以外の鶏舎で作業することがあるとのこと。そのほか、自社が所有する化製場で従事する実習生 4 名のうち 3 名が当該農場の飼養管理を手伝うことがあるとのこと。直近では 3 月 26 日～28 日に飼養管理を手伝っていたとのこと。
 - ② パート従業員の一部は GP センターにおいて洗浄前の検卵作業を行っており、それ以外は農場内の清掃業務を行うとのこと。
- (6) 農場の飼養衛生管理
- ① 衛生管理区域の周囲は塀やロープが設置され、境界が分かるようになっていた。また、農場入口には立入禁止看板と消毒ゲートが設置されていた。
 - ② 農場内は通路部分を中心に石灰が撒いてあり、特に鶏舎入口周辺は週 1 回程度の頻度で散布しているとのこと。
 - ③ 従業員は出勤後、衛生管理区域内の事務所で衛生管理区域専用作業服、長靴の着用、手指消毒を行っているとのこと。鶏舎に入る際は、鶏舎前室で鶏舎専用長靴の履き替え、手指消毒、防護服の着用、手袋の着用を行った上で、さらに踏込み消毒（逆性石けんに消石灰を混ぜたもの、毎日又は汚れたら都度交換）を実施しているとのこと。
 - ④ 農場によると、飼料業者は消毒ゲートで車両消毒後、来客用のナイロンつなぎと長靴を着用し、衛生管理区域に入るとのこと。その他の来訪者については車両消毒以外の着替えや靴の履替え等について把握していないとのこと。なお、当該農場の従業員以外の者が鶏舎に立ち入る際は、従業員と同様の手順で鶏舎に入るとのこと。
 - ⑤ 発生鶏舎の換気は季節によって換気方法を変えており、調査を行った時期は、鶏舎の入口から見て奥の換気扇から排気し、その陰圧により入口側のライトトラップから吸気する強制換気を実施していた。なお、吸排気口には、野生動物対策として、内側に金網、外側にシャッターが付いていた。
 - ⑥ 飼料は鶏舎横の飼料タンクから鶏舎内のラインを通じて自動給餌を行っているとのこと。
 - ⑦ 給与水は井戸水を利用しており、塩素消毒を実施した上で、鶏舎内のラインを通じて自動給水を行っていた。鶏舎内では背中合わせになったケージの間にラインがあり、背中合わせのケージの鶏は同じニップルから飲水する構造となっていた。
 - ⑧ 鶏糞は農場内で堆肥化等は行っておらず、引取業者の来場時に除糞ベルトを稼働させ、直接業者のダンプカーに積み込んでいたとのこと。1 鶏舎当たり 5 日に 1 回程度の搬出であったことから、ほぼ毎日どこかの鶏舎の除糞を行っていたとのこと。発生鶏舎及び隣接鶏舎には外部への開口部に自動シャッターが設置されていた。
 - ⑨ 死亡鶏は各鶏舎担当の従業員が衛生管理区域内に数か所設置された容器に運んだ後、別の従業員が別の蓋付き保管庫 1 か所に集約し、処理業者が週 3 回、この保管庫ごと回収すること。保管庫は、使用後に化製場で洗浄・消毒された後農場に返却され、農場でも消毒を行うとのこと。また、廃鶏は自社化製場に運搬すること。

- ⑩ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は鶏舎内の洗浄・消毒を行い、空舎期間は計 21 日程度設けていたとのこと。
- ⑪ 集卵はバーコンベアにより鶏舎から GP センターまで運搬される。鶏舎外を走行するバーコンベアは建屋で全面が覆われており、隙間等はなかった。
- ⑫ 農場奥に新鶏舎を建設中で、3月上旬から工事業者がほぼ毎日出入りしているとのこと。
- ⑬ 除雪機を近隣の系列農場に貸し出すことがあるが、この時期は既に雪が解けているため、3月以降の貸し出しは行っていないとのこと。
- ⑭ 管理獣医師はいるものの、今年に入ってから訪問はなかったとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

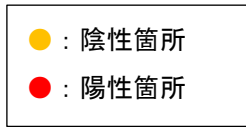
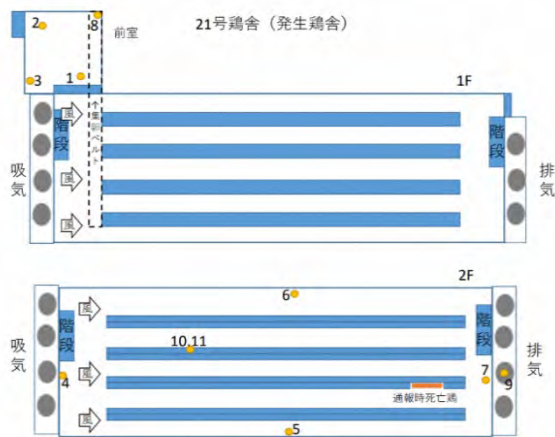
- ① 農場によると、鶏舎内でネズミを見かけることがあり、粘着シートや殺鼠剤を設置しているとのこと。調査時、野生動物による食害やハエ等の害虫は見られなかった。
- ② 農場によると、農場内ではネコを見かけることがあるとのこと。また、アライグマ、シカをたまに見かけるとのこと。野生動物による飼養鶏や鶏卵等への被害は確認されていないとのこと。
- ③ 農場によると、野鳥の農場内への飛来はあまり多くないとのこと。調査時は、農場上でカラスやハトの飛行を数羽程度ずつ確認した。

(8) 環境サンプル

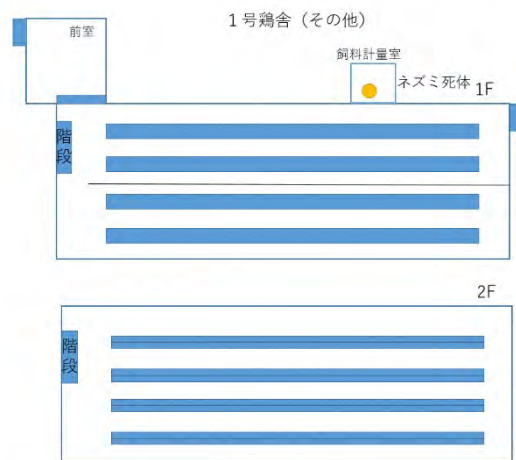
環境検査材料リスト（下線部はウイルスが検出された検体）

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎（21号舎）	前室床(1)、長靴底(2)、作業用手袋(3)、壁(4, 5, 6, 7)、集卵ベルト(8)、換気扇(9)、気管(死鶏、10)、クロアカ(11)
隣接舎（22号舎）	前室床(12)、長靴底(13)、作業用手袋(14)、壁(15, 16, 17, 18)、集卵ベルト(20)、 <u>換気扇(21)</u> 、 <u>気管(死鶏、22, 24, 27, 28)</u> <u>クロアカ(死鶏、23, 25, 26, 29)</u>
未発生舎（1号舎）	ネズミ死体(19)

【発生鶏舎採材場所見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】



8 4. 北海道5例目（千歳市）の事例

(1) 概要

① 所在地

北海道千歳市

② 飼養状況

採卵鶏 約31万羽

鶏舎	飼養羽数	日齢
11号舎 <発生鶏舎>	39,151羽	419日
12号舎	40,030羽	328日
13号舎	40,139羽	254日
14号舎	40,226羽	163日
15号舎 (空舎)	—	—
16号舎	36,998羽	653日
17号舎	36,938羽	597日
18号舎	37,019羽	541日
19号舎	39,151羽	419日

(令和5年4月5日現在)

③ 発生確認日

令和5年4月7日

④ 農場見取図



(2) 現地疫学調査実施年月日
令和5年4月7日

(3) 農場の周辺環境・農場概況

- ① 発生農場は平野部にあり、近隣は田畑や林に囲まれている。
- ② 当該農場は2階建てウインドウレス鶏舎9棟からなり、発生時は1棟が空舎であったが、それ以外の鶏舎ではいずれも採卵鶏が飼養されていた。
- ③ 当該農場は、国内82例目及び83例目発生農場をそれぞれ中心とした半径3km以内の移動制限区域に位置している。

(4) 通報までの経緯・発生時の状況

- ① 国内82例目及び83例目の発生に伴い、それぞれ3月28日及び4月3日に実施した周辺農場検査において陰性が確認されていた。
- ② 飼養管理者によると、発生鶏舎（通報時420日齢）では、通常の死亡羽数が1日当たり4羽程度であったところ、4月6日に同一ケージ内で5羽中5羽の死亡が確認されたことから、家畜保健衛生所に通報したとのこと。この際、採餌、飲水量及び産卵数については、異常は認められなかったとのこと。
- ③ 鶏舎のケージは背中合わせの直立6段（各階3段ずつ）4列で、発生ケージは鶏舎の従業員出入口から見て奥側から3分の1程度、壁側の列に位置しており、2階部分の下から3段目で発生が確認されたとのこと。
- ④ 疫学調査時は、発生ケージを中心に上下・左右の数ケージで1～数羽の死亡鶏が散在していた。発生鶏舎の他のケージや、その他の鶏舎では異状な死亡鶏等は確認されなかった。

(5) 管理人及び従業員

- ① 当該農場の鶏舎は正社員5名、パート社員4名の計9名で管理されていた。系列農場及び当該農場の間で従業員の行き来はなかった。
- ② 正社員は、それぞれ農場内の2～3棟の鶏舎を担当していた。また、パート社員は主に集卵施設での作業を担当していたが、集糞作業やオールイン・アウト時など、比較的大がかりな作業を行う際に鶏舎での補助を行っていた。
- ③ 各鶏舎担当者は、午前中に担当鶏舎内の鶏の健康観察を行い、給餌や給水設備の点検、集卵や除糞などの作業等に従事していた。

(6) 農場の飼養衛生管理

- ① 農場の境界にはロープが張られており、入口付近には関係者以外立入禁止の看板が立てられていた。
- ② 飼養管理者によると、従業員の車両や飼料運搬車等が農場に入る際、3月28日から農場入口の動力噴霧器で車両消毒を行っていたとのこと。
- ③ 従業員が農場に入る際は、集卵施設横に設けられた小屋で衛生管理区域専用の作業服及び長靴を着用していた。また、鶏舎に入る際には、鶏舎前室において各鶏舎専用の防護服及び長靴を着用し、手指消毒を行っていたとのこと。
- ④ 従業員の車両や飼料運搬車が衛生管理区域内の鶏舎付近に進入する際は、運転手及び従業員は集卵施設横の小屋で衛生管理区域専用の長靴に履き替え、手指消毒を行い、再度車両消毒を実施していたとのこと。また、鶏糞回収業者が鶏舎付近に立ち入る際は、小屋で長靴の交換や手指消毒は行わず車両消毒を実施するのみであるが、小屋から先は降車することはないとのことであった。
- ⑤ 鶏卵は、集卵ベルトで集卵施設に運ばれる。集卵ベルトは2経路あり、発生鶏舎を含む3

鶏舎が同じ経路であった。経路上の鶏舎外の部分は、完全にカバーで覆われていた。

- ⑥ 鶏糞は、鶏糞ベルトで鶏舎外に運ばれ、ベルト車を介して直接、鶏糞運搬車に積み込まれ、処理施設に運ばれていた。除糞作業は鶏舎ごとに5日ごとに行われており、発生鶏舎では通報の2日前に実施されていた。除糞作業の際は、従業員が鶏舎内に入ったあと、通常の出入口の反対側の出口から出て、ベルト車の運転やスイッチの操作をする必要があった。この際、従業員は鶏舎作業用の防護服を脱ぎ、外用の消毒済み長靴に履き替えていた。
- ⑦ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトが行われており、直近では、本年3月下旬に発生鶏舎以外で実施されたほか、発生鶏舎では昨年6月に実施されていた。
- ⑧ 各鶏舎は、鶏舎の床下部にある換気扇で吸気、屋根部分から排気が行われる構造になっていた。ファンのある吸気口には約2cm間隔の金網が、天井部分の排気口には防鳥ネットが掛けられ、定期的に点検されているとのこと。また、近隣での高病原性鳥インフルエンザの発生以降、週に1回程度、吸気ファンに直接消毒薬を噴霧していたとのこと。
- ⑨ 飼養鶏の給与水には、塩素消毒した井戸水が使用されていた。
- ⑩ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して給餌する構造となっていた。
- ⑪ 飼養管理者によると、死亡鶏は、毎朝の見回りの際にプラスチック製の袋に入れて回収され、鶏舎外に設置されたボックスに投入後、農場の車両により、農場内に設置された鉄缶に集められ、収集業者の車両により搬出されるとのこと。この袋は、使用後に洗浄・消毒したあと、鶏舎内に戻して再利用していたとのこと。鉄缶は83例目の発生までは83例目の農場の衛生管理区域外に置かれていたが、発生に伴い、この農場の敷地内に移設していた。
- ⑫ 飼養管理者によると、管理獣医師やネズミ駆除業者は、鳥インフルエンザが多く確認されるようになった昨年11月以降、訪問はないとのこと。
- ⑬ 除雪機を近隣の系列農場に貸し出すことがあるが、この時期は既に雪が解けているため、3月以降の貸し出しは行っていないとのこと。

(7) 野鳥・野生動物対策

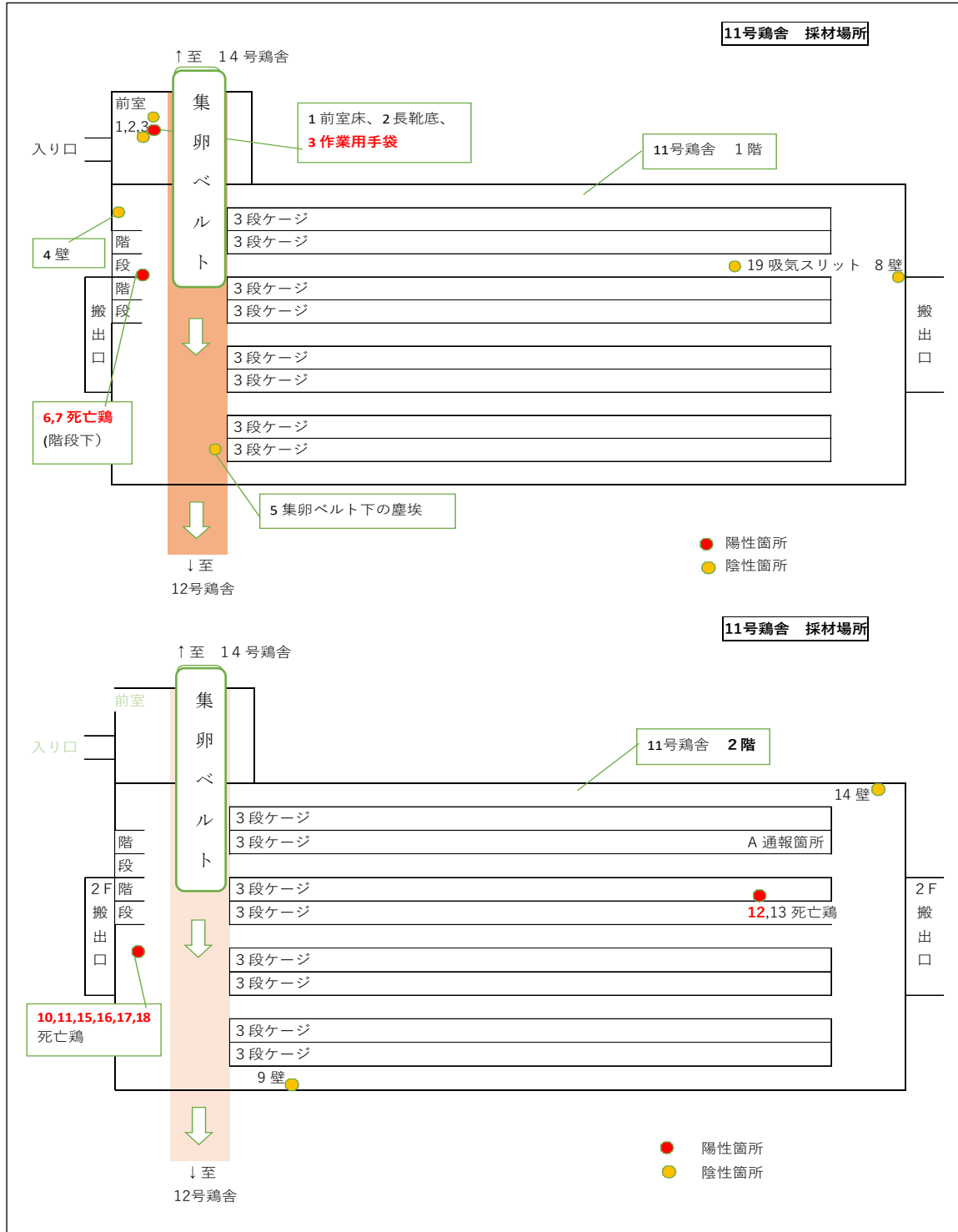
- ① 飼養管理者によると、鶏舎外ではカラス、スズメ、セキレイ等を見かけることがあり、調査時にはカラスが複数羽確認された。
- ② 飼養管理者によると、鶏舎内ではネズミを時々見かけることがあり、ネズミ対策として殺鼠剤の散布と捕獲用の粘着シートの設置をしているとのこと。
- ③ 鶏舎と集卵ベルトの接合部は隙間がなく、鶏舎から出ている除糞ベルトの開口部には、除糞作業時以外はパネルで塞がれていた。
- ④ 調査時には、発生鶏舎内で糞やかじり痕などのネズミの痕跡が確認されたほか、鶏舎外に設置されたネズミの回収容器の中に、鶏舎内で捕獲されたネズミの死体を複数確認した。

(8) 環境サンプル

環境検査材料リスト (下線部はウイルスが検出された検体)

採材場所	採取したサンプル
発生鶏舎 (11号舎)	前室床、長靴底、 <u>作業用手袋</u> 、壁、集卵ベルト、 <u>死亡鶏 (気管、クローアカ)</u> 、1階床の吸気スリット
未発生舎 (14号鶏舎前)	ねずみ回収用ペール内のねずみ死体

【発生鶏舎採材場所見取り図】



【発生鶏舎以外の採材場所】

